

# 源氏物語における「かけかけし」

— 表現論的観点から —

小原みと希

## 一 問題の所在

源氏物語の表現は、物語の構造に連動している。表現による結びつきを見出すことは、大勢の登場人物を抱える源氏物語を読解するうえで重要な視点である。繰り返される表現は、帖をまたぐ長大な物語の中で、それぞれの人物の有り様を明示するとともに、差異と反復をもって、それぞれの人物造型の個々の位置を明らかにしている。数ある主題がばらばらにならずに源氏物語という作品としてまとまりを持って読むことができるのはなぜか。膨大な情報をまとめあげるのは構造だけではない。差異や反復を持った表現が物語の結束性を高め、体系化する。物語を統括する要素のひとつは、紛れもなく表現である。作品においてどのような言葉が選ばれ、使用されるかは、作品の特性に関わっている。語彙の選択に一貫性はある

のか。一貫性があるならば、どのような基準を持つのか。その語彙が選択されたことで生じる意味とは何か。

たとえば、源氏物語には「きよら」と「きよげ」によって光源氏型と頭中将型に書き分けがなされているという指摘がある。しかし、誰がどのように書き分けられているかということだけでなく、場と文脈に則した表現が選択され、人物造型に関わっているということも考えられるだろう。本稿が着目するのは、「かけかけし」と「すぎすぎし」の書き分けである。この二つの形容詞は源氏物語の中で明確に使い分けられている。それにもかかわらず、従来、両者の違いは曖昧なまま解釈されてきた。まずは、「かけかけし」がどのように解釈されてきたのかを見てみよう。

椎本巻にて、光源氏の子である薫は、宇治の俗聖・八の宮と親睦を深めていく中で、姉姉妹(大君と中の君)の

ことを託されることになった。そして、八の宮が亡くなると、宇治へ弔問し、その女房である弁の尼君を相手に自分の思いを語る。

【一】「いはけなかりしほどに、故院〔光源氏〕に後れたてまつりて、いみじう悲しきものは世なりけりと思ひ知りにしかば、人となりゆく齡にそへて、①官位、世の中のにほひも何とおぼえずなん。②ただかう静やかなる御住まひ〔八の宮邸〕などの心にかなひたまへりしを、かくはかなく見なしたてまつりなしつるに、〔私は〕いよいよいみじく、③かりそめの世の思ひ知らるる心もよほされにたれど、④【心苦しうてとまりたまへる御事ども〔大君と中の君のこと〕の、絆など聞こえむはかけかけしきやうなれど】、⑤ながらへても、かの御言〔故八の宮の言葉〕あやまらず、聞こえうけたまはらまほしきになん。さるは、おぼえなき御古物語〔柏木と女三宮の間に生まれたという薫の出生の秘密〕聞きしより、いとど世の中に跡とめむともおぼえずなりにたりや」

（椎本・5・二〇〇頁）

薫は、①貴族としての立身出世に対して何とも思わない、②ただ静かな宇治の八の宮邸での生活などが自分の望むことだと述べる。しかし、③仏道への憧れはあると言いながらも、④【自分が大君と中の君の事を絆などと

申し上げるのは「かけかけしき」ように見えるかもしれないけれど】⑤八の宮の言葉に従い、宇治の姉妹を世話していきたくと伝える。しかし、ここで薫が譲歩した【④の傍線部】に関しては、古注をみても、解釈がむずかしいことがうかがえる。

◆四辻善成『河海抄』椎本

「かけくしきやうなれど」項  
かけまくもかしき心歎。又いまくしき心歎。或はことくしきやうなる心にもいへる歎。

『紫明抄・河海抄』（角川書店、五五五頁）

◆一条兼良『花鳥余情』椎本

「かけくしきやうなれど」項  
かゝつらふやうなる心にや。下にもこの詞あり。河海の説おほつかなし。

源氏物語古注集成1『松永本花鳥余情』

（桜楓社、二九二頁）

古注として最も古い『河海抄』において、「かけかけし」がどのような意味か分からず、複数の意味を候補として列挙している。また、『花鳥余情』は、女性に積極的に関わりとうとするような気持ちとして「かけかけし」を解釈しながら、『河海抄』の説が曖昧で解釈がはっきりしないことを指摘している。古注では、用例「一」に限らず「かけかけし」に関わる箇所に対して広範に注釈が付さ

れており、これらのことから「かけかけし」という語彙自体が解釈のむずかしい語であることが理解できる。

例えば、用例「一」について、『源氏物語の鑑賞と基礎知識』宮川葉子「語句解釈⑤」は次のように解釈している。

かけかけしⅡいつも心に懸けている、それが心に懸かっている意。「かけかけし」には、好色がましい、色めかしいの意もあり、絆など聞こえむはかけかけしきやうなれど」を「絆であるなどと申し上げるのは懸想めいているようですが」と通釈するものもある（日本古典文学全集本（旧版））。しかし、ここは「姫達の存在がいつも心に懸かっているのです、出家願望が果たせないと言うのでは、押しつけがましく重庄をかけることになるようですが」の解釈をする方が良いと思われる。

『源氏物語の鑑賞と基礎知識⑬椎本』

（至文堂、二〇〇一年、一一三頁）

ここでは「かけかけし」を単に「懸想めいている」とせずに薫の出家願望と関わって解釈している。同様の解釈は、別の場面の「かけかけし」に関しても見られる。

【二】「玉鬘は」さりとて、かかるありさま〔光源氏の養女として邸に住んでいること〕もあしきことはなけれども、この大臣の御心ばへのむづかしく心づきな

〔光源氏に懸想されている状態のことを指す〕も、いかなるついでにかは、もて離れて、人の推しはかるべかめる筋〔世間に疑われている養父との仲〕を、心清くもありはつべき、実の父大臣も、この殿の思さむところを憚りたまひて、うけばりてとり放ち、けざやぎたまふべきことにもあらねば、なほ、とてもかくても見苦しうかけかけしきありさまにて心を悩まし人〔世間〕にもて騒がるべき身なめり、となかなかこの親尋ねきこえたまひて後は、ことに憚りたまふ気色もなき大臣の君の御もてなしを取り加へつつ、人知れずなん嘆かしかりける。

（藤袴・3・三二七―三二八頁）

これについて『鑑賞と基礎知識⑩御幸・藤袴』は「かけかけしき有様Ⅱいつも心に掛けている様子。特に、好色がましい、色めかしい様子」〔中嶋明恵「語句解釈④」〕と解釈している。新全集でも、【二】の傍線部に対して好色の意で解釈している。

【現代語訳】やはりどのみち、みっともなく色めいたことにかかわりあって心を悩ませ、人にうるさく取り沙汰されねばならぬ身の上なのだろう。

【頭注五】「かけかけし」は「好色がましい」、が原義。

ここは、男たちの好色心で見られがち、の意。以上のように、「かけかけし」は好色を表す語として認

識されてきた。

従来、「かけかけし」と同じく好色を表す語として扱われてきたのが、「すぎずきし」である。光源氏がどのような人物であるかを語る場面では、「すぎずきし」が次のように解釈されている。

〔三〕「光源氏が」まだ中将などにものしたまひし時は、内裏にのみさぶらひようしたまひて、大殿には絶え絶えまかでたまふ。忍ぶの乱れや、と疑ひきこゆることもありしかど、さしもあだめき目馴れたるうち、つけのすぎずきしさなどは好ましからぬ御本性にて、まれには、あながちにひき違へ心づくしなることを御心に思しとどむる癖なむあやにくにて、さるまじき御ふるまひもうちまじりける。

(帯木・1・五三―五四頁)

傍線部に関して、新全集(現代語訳)は「そんなふう浮気っぽい、ありふれた出来心の色事などは好まれぬ個性分で」と訳し、「すぎずきし」を「色事」と解釈している。

このように、「すぎずきし」を「色事」、「かけかけし」を「色めいたこと」と解釈するところをみると、二つの表現はほとんど同じ意味として解釈されてきたことが分かる。現段階で、「かけかけし」と「すぎずきし」は同義的に理解されていて、ほとんど区別されていないのである。

ある。

〔四〕「かけかけし」と「すぎずきし」という二つの形容詞は、明らかに別の言葉でありながら、現代語訳にすると違いが見えにくくいものとしてある。もしも二つの形容詞が同じような価値をもつ表現ならば、同じような場や文脈で使用されるはずである。あるいは、そもそも両者は語彙としての意味が異なっていて、必要に応じて使い分けられているはずである。

形容詞「かけかけし」は、源氏物語を初出とする語であり、源氏物語に僅か10例が見られる。源氏物語以前には出現しないため、「かけかけし」の意味を探る際は、源氏物語の参照が不可欠となる。古注でも現代注でも解釈に揺れが生じているのは、「かけかけし」の用例数が少なく、実態がよくわからないためであろう。さらに言えば、用例〔二〕のように、物語の内容に密接に関わる場合、「かけかけし」という語彙の解釈は一層むずかしくなってしまうようだ。本論文では、これら二つの形容詞の違いについて、日本語学的なアプローチから明らかにすることを目的とする。

## 二 「かけかけし」と「すぎずきし」の相違点

「かけかけし」表現を理解するために、語義の確認を行い、「すぎずきし」と比較し、どのような使い分けがある。

あるのかを明らかにしてみよう。

形容詞「かけかけし」と「すぎずきし」は疊語である。疊語とは「二つの単語ないし語構成要素からなる複合語のうち前項と後項とが同一のもの、つまり一つの単語ないし語構成要素を重複したものを言う」<sup>(5)</sup>。「かけかけし」と「すぎずきし」は、動詞(連用形)が語基として重複し形成された形容詞である。語基の特定は、語の原初的な意味の理解に通じるはずである。はじめに、それぞれの語基の分析を行い、その意味的特徴を明らかにしていく。「かけかけし」の語基と想定される動詞「かける」<sup>(6)</sup>は、「心ヲかける」・「心ニかける」の用法が目立つ<sup>(8)</sup>。「心ヲかける」と「心ニかける」の意味的特徴は次のようになる。

▽「心ヲかける」・対象(相手)に心を向けている状態のことをいう。

〔四〕秋の夕は、まして、心のいとまなく思し乱るる人の御あたり、心に心をかけて、あながちなるゆかりもたづねまほしき心まさりたまふなるべし

(若紫・1・二三九頁)

▽「心ニかける」・思いを心に留めている状態のことをいう。

〔五〕「光源氏は」かやうのついでにも、かの五節を思し忘れず、また見てしがなと心にかけたまへれど、いと難きことにて、え紛れたまはず。

(濤標・2・二九九頁)

「かける」は、心が対象に向かう様子を示し、一定の方向性を持つことを示唆する。

これに対して、「すぎずきし」の語基と想定される動詞「すく」は、特定の方向性を持たない特徴がある。たとえば「好き心」は、特定の個人ではなく、複数の可能な恋愛対象への強い関心を持つ心の状態を意味する。また、「すく」は「何ヲ・何ニ」のような格を取らない自動詞であり、非人間の主語とも結びつかない。人の心を表す語だからである。そして、後接する助動詞は「たり」「り」に偏る。

〔六〕「さかし。なまめかしう容貌よき女の例には、なほひき出でつべき人ぞかし。さも思ふに、いとほしく悔しきことの多かるかな。まいて、うちあだけすぎたる人の年積もりゆくまに、いかに悔しきこと多からむ。人よりはこよなき静けさと思ひしだに」

(朝顔・2・四九三頁)

〔七〕中宮、「なほかく独りおはしまして、世の中にすいたまへる御名のやうやう聞こゆる、なほいとあしきことなり。何ごとももの好ましく立てたる心なつかひたまひそ。

(総角・5・二七七頁)

「たり」「り」によって、動詞が状態表現となることから、「すく」は人間の心の状態を表していることが分かる。

る。これまでの説明をまとめるため、「かける」と「すく」の用法を理解するうえで的好例を挙げよう。次の用例は、光源氏が未摘花の邸を訪ね、未摘花の様子を探ろうとする場面である。

〔八〕「光源氏は透垣のただすこし折れ残りたる隠れの方に立ち寄りたまふに、もとより立てる男ありけり。〔光源氏は〕誰ならむ、心かけたる好き者ありけり」と思ひて、蔭につきてたち隠れたまへば、頭中將なりけり。

（未摘花・1・二七一頁）

光源氏は、自分と同じように、未摘花に好意を抱き、まだ見ぬ女性に強い関心を持って近づこうとする男がいることに気づく。特定の相手（未摘花）に「心ヲかける」表現と「好き者」の表現は相互に矛盾しない。「好き者」とは異性に対する関心が高い者を意味するからである。したがって、男女の関係における文脈では、動詞「かける」は特定の相手へ向けられる強い関心を表し、動詞「すく」は不特定多数の異性への強い関心を表している。恋愛に関する「すぎずきし」は「すく」の持つ「不特定多数の異性への強い関心」という意味の特徴と一致する。「すぎずきし」は、恋愛において不特定多数の異性への興味関心の程度が著しいことを表す。それは従来の「好色がましい」という解釈に通じている。

よろしからぬ御気色におどろきて。すぎずきしや」と聞こえたまへり。「この大将の、かかるはかなし」と言ひたるも、まだこそ聞かざりつれ。めぐらしう」とて笑ひたまふ。心の中には、かく領じたるを、いとからしと思す。

（真木柱・3・三九六頁）

〔九〕明石入道は、代筆によって娘と光源氏の恋の仲立ちをしている。入道は二人が夫婦になることを望んでいる。〔一〇〕髭黒大将は、妻に代わって光源氏に返事をすること、二人の接近を阻止している。髭黒は玉鬘の独占を望んでいる。手紙の代筆は、光源氏からすれば、出過ぎた行動であり、望ましいものではない。それを理解しながら、明石入道も髭黒も自分の望みのために手紙を代筆している。「すぎずきしや」と自己評価することは、相手が感じるであろうことを先んじて述べて、へりくだってみせるためである。

〔すぎずきし〕は過度な行動を取る人々の心情を反映する。欲望を優先させる心は、過度な行動に現れる。他者や自己を評価する用法では、欲望を自制せずに他者へ働きかけてしまう心を「すぎずきし」と評価する。「すぎずきし」という表現は、他者よりも自分が優先される、人の心の過剰性を捉えている。「すぎずきし」が、自制心を持たずに振る舞う心的態度を、不特定多数の異性へ

しかし、「すぎずきし」が意味するところは、好色の意にとどまらない。なぜなら、「すぎずきし」は「好色」という事物の属性だけでなく、人の感情や評価に関わる語だからである。

〔九〕「明石入道は内に入りてそのかせど、むすめはさらに聞かず。いと恥づかしげなる御文のさまにさし出でむ手つきも恥づかしうつましう、人の御ほどわが身のほど思ふにこよなくて、心地あしとて寄り臥しぬ。言ひわびて入道ぞ書く。いとかしこきは、田舎びてはべる袂につつまあまりぬるにや、さらに見たまへも及びはべらぬかしこさになん。さるは、

ながむらん同じ雲居をながむるは思ひも同じ思ひなるらむとなん見たまふる。いとすぎずきしや」と聞こえたり。陸奥国紙に、いたう古めきたれど、書きざまよしばみたり。「光源氏は」げにもすぎたるかなと、めざましう見たまふ。

（明石・2・二四八頁）

〔一〇〕「玉鬘が」「光源氏への」御返り、ここにはえ聞こえじ」と、書きにくく思いたれば、「髭黒大将は」「まる聞こえん」とかはるもかたはらいたしや。「菓がくれて数にもあらぬかりのこをいづ方にかはとりかへすべき

の関心が移り変わる心理状態にあると評価したり、自分を優先して出過ぎた振る舞いをしていてと評価したりする。

このような心の過剰性は、男性だけに表現されるわけではない。「すぎずきし」は女性に対しても用いることができる。次の用例は、筑紫の五節が光源氏に文を送る場面である。五節は、女性から男性に恋の歌を詠みかける振る舞いを出過ぎたことと認識したうえで、それを咎めないでくれという。五節は自らの振る舞いを「すぎずきし」と評価している。

〔一一〕五節は、とかくして聞こえたり。

「琴の音にひきとめらるる綱手縄たゆたふ心君しるらめや

すぎずきしさも、人な咎めそ」と聞こえたり。

（須磨・2・二〇五頁）

以上、男女を問わず、人の心の過剰性を表現することができるというのが「すぎずきし」の特徴である。

ここまで「すぎずきし」について確認してきたが、「かけかけし」と比較するうえで、一点注意しておくべきことがある。それは、「すぎずきし」が男女を問わず、人の心の過剰性を表すことができるのに対して、「かけかけし」は男性を表す際にしか用いられないという点がある。女性が男性に好意を向ける状況で使用されること

はなく、「かけかけし」の用例はすべて、男性が特定の女性に好意が向けている場合にのみ用いられている。こうした特徴は、語基「かける」の「特定の相手へ向けられる強い関心」を表すという意味の特徴とも一致する。そのため、「かけかけし」では誰(男)から誰(女)への好意であるかが明確になる(本論文末に全用例を示した。参照願いたい)。これは、「すぎすぎし」には見られない独自の特徴としてある。

たとえば、かつて光源氏は養女・玉鬘に対して、養父でありながら男女の仲になることを望んでいた。「かけかけし」の用例は10例のうち3例が光源氏から玉鬘に対する好意を表したものである。次の用例では、光源氏が玉鬘に男女関係望んでいた頃の関係を「かの昔のかけかけしき筋」と表現し、現在は放棄していることを伝えている。

〔一二〕「光源氏は右の大殿(髭黒)の参り仕うまつりたまふこと、いにしへよりもまさりて親しく、今は、北の方(玉鬘)もおとなびはてて、「光源氏はかの昔のかけかけしき筋思ひ離れたまふにや、(玉鬘は)さるべきをりも渡りまうでたまひつつ、対の上(紫の上)にも御対面ありて、あらまほしく聞こえかはしたまひけり。」

(若菜下・4・一七八頁)

### 三 「かけかけし」表現の解釈

『源氏物語』において「かけかけし」の評価対象は、光源氏・冷泉帝・柏木・薫・匂宮と主人公に限定されている。ここからは「かけかけし」表現は主人公たちとどのように関わるのかを見ていく。

「かけかけし」は『男性が特定の女性に恋着する様子』を描き出すという特徴を持つが、次に示す用例は例外的で特異なものである。柏木は女三宮を諦められず、女三宮付きの女房である小侍従に接近する。柏木の話は、人から「伝え聞」いた形で展開され、朱雀院の言葉を引き、自分を「まめやかに仕うまつるべき人」として売り込み、女三宮のもとへ手引きさせようとする。その際、柏木は光源氏について次のような表現を用いる。

〔二三〕院の上(朱雀院)だに、「光源氏はかくあまたにかかけかけて、(女三宮は)人に庄されたまふやうにて、独り大殿籠る夜な夜な多く、つれづれにて過ぐしたまふなりなど、人の奏しけるついでにも、すこし悔い思したる御気色にて、同じくは、ただ人の心やすき後見を定めむには、まめやかに仕うまつるべき人をこそ定むべかりけれ、とのたまはせて

(若菜下・4・二一八頁)

「人」の言葉を借りながら語っているものの、光源氏を

玉鬘と紫の上の対面の前に挿入される語りによる草子地は、過去の出来事をわざわざ引き出ししている。光源氏が男女関係を望んでいた女性でありながら、玉鬘が紫の上と理想的な関係を構築することができたのは、光源氏が玉鬘を諦める形でしかあり得ないということを示すかのようである。「かけかけし」は単に男女の仲を指すのではなく、男性が特定の女性に好意を向けていることを意味している。つまり、「かけかけし」は男性の恋愛の様相がどのようなものであるかを伝える形容詞なのである。

「かけかけし」が『男性が特定の女性に恋着する様子』を描き出すことは分かった。しかし、語義を理解したからといって、源氏物語における「かけかけし」表現を明らかにしたことにはならない。作品の内容と照らし合わせない限り、表現を明らかにすることはできないからである。解釈の際に、語義が不明では内容を頼りにするしかない、内容だけを頼りにすると表現価値を無視してしまう。表現がどのようなものであるかを明らかにするためには、語義の確認だけでは足りない。表現が作中どのように描かれているのかを確認していく必要がある。

「かけかけし」においても、源氏物語の内容から表現の意味を照応してみなければならぬ。

「かけかけしく」思っているのは柏木である。ここでは、妻妾を「あまたに」<sup>10</sup>困う光源氏を「かけかけし」と表現している。玉上評釈は、「上皇さまでさえも『こんなにおおぜいに関係があつて、誰かに負けていらっしゃるよ、お一人でやさみになる夜が多く、所在なく日を送っていらっしゃる』などと申し上げる人があつたときに、少し後悔あそばしたお顔つきで」と訳し、『鑑賞と基礎知識』は「源氏がこのように多くの婦人に情けを掛けて」と訳す。

ここで注目すべきは、「かけかけし」が単なる男女関係を指すのではないことである。語義の理解に基づき、「かけかけし」が特定の女性に恋着することを伝える表現であるとするならば、「あまたに」という語とは結びつかないように思われる。しかし、光源氏が六条院にいる女君たちを妻妾であると公的に認めている実情があるから、柏木の発言は成立する。光源氏が妻妾たちひとりひとりを自分のもとに留めておきたいが故に一つの邸に集めたように見えているのである。光源氏があまたに抱える妻妾ひとりひとりに恋着しているからこそ、複数の女性とも安定した社会関係を維持し、後宮のような空間を作り上げた柏木は考えている。その中で、女三宮がさみしい思いをするのは当然である。柏木は、多くの女性と安定した関係を築いている男との結婚は不幸だと言

いたのである。

「すぎすぎし」と「かけかけし」の表現は、いずれも他者との関係の結び方に関する個人の心的態度を反映している。しかし、その内容に関しては同じものとは言えない。「すぎすぎし」は、恋愛においては、異性への関心という欲望が表に現れている状態を伝える。その状態における男女関係は一時的なものであり、関係の維持が見込まれないことが前提される。それに対して「かけかけし」は《男性が特定の女性に恋着する様子》があり、それによる《男女関係の持続性》も確認できる。それは、《男性からの積極的な働きかけ》に支えられている。一人の女性と関係を成立させた後も、関係を維持するために、その女性に何度も繰り返し接近する熱意が必要である。「あまたにかけかけしくて」と評された光源氏は、特定の女性たちひとりひとりとの安定した社会関係を六条院という形で築きあげ、成立させたのであるから、これと矛盾しない。

「かけかけし」の《男性が特定の女性に恋着する様子》・《男女関係の持続性》・《男性からの積極的な働きかけ》といった要素は、作中でどのように描かれているか。先に「二三」にて、柏木から光源氏への評価について確認したが、興味深いのは、その一方で、柏木自身も他者から「かけかけし」と評価されている点なのである。

し、これまで確認してきたように、「かけかけし」は「多くの異性への関心の強さ」を語義としないばかりか、「色めかしい」という意味を持ってはいない。では、これをどのように解釈すべきなのか。

小侍従の「あなかけかけしや」とは、人妻である女三宮に対して、姿を見てもいないのに、なおも挑んでくる柏木に対する評価である。柏木は、女三宮が結婚してなおおい寄る手紙を送りつけてくるのであり、女三宮の姿を見たとは知らない小侍従からすれば、「見もせぬ」と言って女三宮との逢瀬を想像する柏木は異常な執着心を持つ人物に見えている。

同じように、柏木自身が自分の行動を「かけかけしきこと」と認識している例もある。

「二五」 「柏木は女三宮のことをよその思ひやりはいつくしく、もの馴れて見えたてまつらむも恥づかしく推しはかられたまふに、ただかばかり思ひつめたる片はし聞こえ知らせて、なかなかかけかけしき」とはなくてやみなむと思ひしかど、いとさばかり気高う恥づかしげにはあらで、なつかしくらうたげに、やはやはとのみ見えたまふ御けはひの、あてにいみじく思ゆることぞ、人に似させたまはざりける。さかしく思ひしづむる心も失せて、いづちもいづちも率て隠したてまつりて、わが身も世に経るさまなら

「二四」 「女三宮の」御前に人繁からぬほどなれば、「小侍従は」この文（柏木の手紙）を持って参りて、…（中略）…「女三宮は」文ひろげたるを御覧す。「柏木が手紙の中で」「見もせぬ」と言ひたるところを、「女三宮は」あさましかりし御簾のつまを思しあはせらるるに、御面赤みて、…（中略）…常よりも御さしらへなければ、「小侍従は」すさまじく、強ひて聞こゆべきことにもあらねば、ひき忍びて例の書く。「一日はつれなし顔をなむ。めざましう、とゆるしきこえざりしを、見ずもあらぬやいかに。あなかけかけし」と、やはりかに走り書きて、「いまさらに色にな出でそ山桜およばぬ枝に心かけきとかひなきことを」とあり。

（若菜上・4・一四九頁）

玉上評釈は小侍従の言葉を「先日は知らぬ顔をなさいましたね。ひどい方とお許ししませんでしたのに、見ないでもなかったとは何ですか。思わせぶりな」として、語にこだわらずに意識する。『鑑賞と基礎知識』は「かけかけし」多くの異性への関心の強さをいう。柏木がふまえた業平歌は、逢って確かめたいというもの。手紙はいかにも色めかしい。婿定めは終わったのに、まるで懸想したようでおかしい」と解す。これは業平の色好みとしてのイメージが先行した結果生じた解釈であろう。しか

ず、跡絶えてやみなばやとまで思ひ乱れぬ。

（若菜下・4・二二五頁）

女三宮は内親王であり、六条院の妻となった女性である。そのため、柏木は近づきたい女性を想像していた。だから、はじめは、思い詰めている自分の心の一端だけを伝えようと考えており、「かけかけしきこと」に至る行動は自制するつもりでいたのである。しかし、女三宮は気位の高い女性ではなかった。女三宮が自分の想像と異なり、物腰の柔らかい女性であることを知ると、自制心を失い、思い乱れてしまう。そして、柏木は女三宮を犯した。「かけかけしきこと」は、本来ならば抑制する必要がある実事に直結するような積極的な行動を意味している。ただ、この関係は持続性を伴わない。公的な関係になり得ないからである。「かけかけし」の《男性が特定の女性に恋着する様子》・《男女関係の持続性》・《男性からの積極的な働きかけ》といった要素は、柏木に関わるとき、《男女関係の持続性》だけが失われる。残された要素をまとめると、源氏物語は「かけかけし」表現によって《特定の女性との関係にこだわる心の過剰性》を男の恋愛の様相として描いていることになる。そして、「かけかけし」表現は、柏木の実子でありながら、光源氏の子として養育された薫にも用いられている。ただし、次の用例のように、その表現のされ方は、これまでと異なる

っている。

薫は、大君に近づく口実をつくるために、匂宮と中の君の仲人となることを買って出る。

「二六」 「匂宮は心の深くしみたまふべかめる御心ざまにかなひ、ことに背くこと多くなどものしたまはざらむをば、さらに、軽々しく、始め終はり違ふやうなることなど、見せたまふまじき気色になむ。人の見たてまつり知らぬことを、いとよう見きこえたるを、もし似つかはしく、さもやと思しよらば、そのもてなしなどは、心の限り尽くして仕うまつりなむかし。御中道のほど、乱り脚こそ痛からめ」と「薫は後見役として中の君と匂宮の縁談の話を」とまめやかにて言ひつづけたまへば、「大君は」わが御みづからのこととは思しもかけず、人（中の君）の親めきて答へんかしと思しめぐらしたまへど、なほ言ふべき言の葉もなき心地して、「いかにとかは。（匂宮を）かけかけしげにのたまひつづくるに、なかなか聞こえんこともおぼえはべらで」とうち笑ひたまへるも、おいらかなるものからけはひをかしう聞こゆ。

（椎本・5・二〇八頁）

薫のものの言いが、匂宮が中の君に懸想しているように伝えるので、匂宮の様子を「かけかけしげに」言い続けていると大君が笑う。この部分は古注も各注釈も混乱し

は、薫の発話の中で「かけかけし」がどのように表現されているかを確認していこう。

総角巻にて、薫は大君に逢瀬を迫るが、逃げられてしまう。部屋に取り残された中の君と共に夜を明かすことになったものの、とうとう関係を結ぶことはなかった。薫は、自分を拒絶した大君に対して、次のように発言している。

「二七」 今宵なむまことに恥づかしく、身も投げつべき心地する。「八の宮が大君と中の君を棄てがたく落しおきたてまつりたまへりけん心苦しさを思ひきこゆる方こそ、また、「私も」ひたぶるに、身をもえ思ひ棄つまじけれ。かけかけし筋は、いづ方にも思ひきこえじ。うきもつらきも、かたがたに忘れたまふまじくなん。宮（匂宮）などの恥づかしげなく聞こえたまふめるを、「あなたは」同じくは心高くと思ふ方ぞことにものしたまふらんと心得はてつれば、「私は」とことわりに恥づかしくて、また、参りて人々に見えたてまつらむこともねたくなむ。よし、かくをこがましき身の上、また、人にだに漏らしたまふな。

（総角・5・二五六頁）

薫は、大君の仕打ちに対して、身投げしてしまいたいほどの屈辱を感じていると恨みながらも、八の宮の代わり

ている。額面通りに受け取れば、薫は匂宮を中の君の夫に推挙しているのだが、薫が匂宮について言いながら自分の恋心を大君へ伝えているようにも思われるからである。ここで、薫は匂宮を単なる懸想人として紹介せず、中の君との安定した社会関係を築くことのできる男として匂宮を語っている。大君は、薫が匂宮を「かけかけしげに」表現していると受け取った。通釈に従えば、これは同時に、薫自身の本心が大君から「かけかけしげ」だと評価されたことに見えてよいことになるだろう。大君が薫を「かけかけし」と評価した、というような単純な図式ではなく、匂宮を経由する形になっている。この場面は、柏木が光源氏を引き合いに出した「二三」とは対照的である。柏木が光源氏をマイナスの要素として利用して自分を売り込んだのに対して、薫は匂宮をプラスの要素として活用し、自分を売り込んでいる。柏木が光源氏を「かけかけし」と言い表したように、光源氏の直系である匂宮には、社会関係を維持することができる造型が引き継がれている。

一方、薫には、光源氏や匂宮のように「かけかけし」に《男女関係の持続性》の要素は見られない。それは柏木の場合と同じである。しかし、薫は柏木の場合と違い、《特定の女性との関係にこだわる心の過剰性》すらも「かけかけし」表現によって否定するようになる。ここから

にこの姉妹の後見役をすべく、出家するわけにはいかなことを述べて、「かけかけし筋」はどちらの女君にも求めるつもりはないと伝えている。その際には、匂宮が「恥づかしげなく」言い寄ることを引き合いに出して抑制的な自分と差別化しながら、「をこがましき身の上」を他言しないように釘をさす。このような薫の発言は、一見、恋愛の常套句のように思われる。「二三」にもあったように、他の男と比較を通して、自分の真面目さを伝えることは恋愛の場で頻出するからである。しかし、薫の人物造型を考える際に、この内実を無視してはならないのではないか。薫の発言は、本論冒頭にて取り上げた「二」と重なりが見られる。用例を一部再掲する。

「二」 官位、世の中のにほひも何ともおぼえずなん。ただかう静やかなる御住まひ（八の宮邸）などの心になほひたまへりしを、かくはかなく見なしたてまつりなしつるに、「私は」いよいよいみじく、かりそめの世の思ひ知らるる心もよほされにたれど、心苦しうてとまりたまへる御事ども（大君と中の君のこと）の、絆など聞こえむはかけかけしきやうなれど、ながらへても、かの御言（故八の宮の言葉）あやまたず、聞こえうけたまはらまほしきになん。

（椎本・5・二〇〇頁）

薫は出家願望を持っているが、宇治の姉妹の行く末が

心配で、出家できないと繰り返す。「かけかけし」には、語基「かける」の「心が対象に向かう様子を示し、一定の方向性を持つこと」という意味の特徴が含まれる。ゆえに、心が向かう先として宇治の姉妹が「心苦しうてとまりたまへる御事ども」として表現されている。「かけかけしきやうなれど」と言うのは、宇治の姉妹との関係に執心しているように人は見るだろうが、自分にはそのつもりがないということを伝えたいからである。「一七」「かけかけしき筋は、いづ方にも思ひきこえじ」と言うのと同じように、自分の意志としては、宇治の姉妹に対して言い寄るつもりはないと告げておきたいのである。むろん、薫は、姉妹を「絆」としながら俗聖として貴族社会から距離をとっている八の宮の暮らしに憧れ、望んでいる。しかし、薫は、自分には《特定の女性との関係にこだわる心の過剰性》がないと絶えず主張するのである。

このように、薫が「かけかけし」表現を使用する場合、《特定の女性との関係にこだわる心の過剰性》を否定する文脈でしか使用されない。もちろん、男性が女性に対して自分が相手に執心していないと示して、信頼を得ようとするのは、決して不自然な言動ではないだろう。単なる演出に過ぎず、本音に対する建て前と捉えてもよい。しかし、この問題を考えるうえで重要なのは、薫が「か

かけかけし」くある自分を否定するという表現をとることが、どのような表現効果を持つのかである。「かけかけし」表現によって《特定の女性との関係にこだわる心の過剰性》を否定した薫はどういう人物として読み取るこ  
とができるのだろうか。

#### 四 「かけかけし」表現と薫の人物造型

「かけかけし」表現から薫の人物造型を考えるうえで、今一度、この表現の出現状況を確認したい。

「かけかけし」は、総角巻を最後に現れなくなる。なぜなら、薫が最も執心していた大君が病死し、物語から退場するからである。大君亡き後の薫は、中の君・浮舟・女一の宮などの女たちに好意を向けるようになる。当然、《特定の女性との関係にこだわる心の過剰性》を捉える「かけかけし」表現は、もはや彼の恋愛の様相を描くにふさわしくないため、二度と用いられない。場や文脈に適さない表現は出てこなくなるのである。「かけかけし」は源氏物語の中で10例しかないにもかかわらず、物語の構造に連動し、一貫性を持って選択されている。<sup>16)</sup>薫は「かけかけし」表現を用いて、《特定の女性との関係にこだわる心の過剰性》を否定した。そして、その特定の女性であったはずの大君すらも失った後、薫は自分の人生を次のように振り返る。

「二八」 現の世〔浮舟が生きていた頃〕には、などかくしも思ひ入れずのどかにて過ぐしけむ、〔浮舟が死んでしまった〕ただ今は、さらに思ひしづめん方なきままに、悔しきことの数知らず。かかることの筋につけて、いみじうもの思ふべき宿世なりけり。

(蜻蛉・6・二二六頁)

浮舟が入水したことを知った薫は、浮舟を宇治に置いたまま顧みずに都で過ごしてきたことを悔やむ。「かかることの筋」とは女性関係を指す。浮舟を失った今、女性との関係を築けないまま、失ってしまうことがおのれの運命なのだと気づいたのである。「かけかけし」は《特定の女性との関係にこだわる心の過剰性》を捉えた表現であったが、薫はそのような心の過剰性を持ち続けるように造型されていない。薫は光源氏のように「あまたにかかけしく」存在することもできず、最後まで「かけかけしきやう」に見えるばかりであった。愛執があるように人から見られるばかりで、その実は、こだわりというものがないのが薫という人物だったと解して、本稿の帰結としたい。さらに薫の愛執に関する問題を解きほぐす必要があるが、これは別稿に譲りたい。

※引用の本文は新編日本古典文学全集により、巻名・冊番号・頁数を示した。なお、引用本文中の傍線部

や括弧( )〔 〕内の注記等は全て私に付したものである。

注

(1) 語彙論を基に文体研究を行った中川正美『源氏物語文体攷 形容詞語彙から』、「序 文学作品の文体研究」和泉書院、一九九九年)は「語が作品の表現意図によって事態や人物と結びつけられ、対義語や類義語が使い分けられていく。このような作品の独自の語義や語の使い分けという用法の偏りは、作品の論理、つまり表現意図に従って作品の独自性を形作っている」と記す。

(2) 明確な書き分けがあるという指摘は、鈴木日出男「読むための重要語句 きよら・きよげ」(『源氏物語ハンドブック』三省堂、一九九八年三月)や犬塚旦「清ら・清げ私見」(『王朝美的語詞の研究』笹間書院、一九七三年)の指摘によって通説化した。

(3) 同書における、「かけかけし」についての具体的な記述(中嶋明恵・基本用語「かけかけし」項)を確認しておく。

「かけかけし」は、『源氏物語』に八例見えるが、他の作品にはほとんど例を見ない語である。動詞「懸く」の連用形の畳語が形容詞に転じたもので、他に「かけかけしげ」も一例見える。いずれも、男女関係の色恋めいたことについて言う。「かくあまたにかけかけしくて」(若菜下巻)は、光源氏が多くの女性を妻とともに暮らし



ていることをいうが、ここで玉鬘がわが身をいう「かけかけしき有様」も同様に、源氏をはじめとして冷泉帝、螢の宮などの求婚者達と、大勢の男性との恋愛関係に悩まざるを得ない状態をいう。玉鬘については他に二例見え、「真木柱」巻には、玉鬘と髭黒右大将の結婚を聞いた冷泉帝が「宮仕へなど、かけかけしき筋ならばこそ思ひ絶えたまはめ」と、なお出仕を促すことばに見えるが、これは女御、更衣などの帝寵を受けることを前提とした出仕なら諦めるが、の意味である。さらに「若菜下」巻に、「かの昔のかけかけしき筋」と、源氏との関係をさして言う。これは、玉鬘十帖の巻々での源氏とのあやうい関係をいう。

『鑑賞と基礎知識』御幸・藤袴』(至文堂、二〇〇三年、一三五頁)

このように、「かけかけし」は「大勢の男性との恋愛関係」や「あやうい関係」などと結びつけられながら、好色の意を表す語として解釈されている。

(4) 辞書を確認しておこう。以下、用例は省略する。

◆北山谿太『源氏物語辞典』(平凡社)

「すぎずきし」項、①物好きなり。好事なり。②好色みらし。好色がまし。

「かけかけし」項、心に懸くるさまなり(多クハ男女ニ關スル事ニイフ)。好色めきてあり。

◆日本国語大辞典(小学館)

「すぎずきし」項、(一)物好きだ。風流だ。粹狂らし

い。(2)好色めいている。色好みの方である。

「かけかけし」項、(一)いつも心にかけている。心が何かに執着している。執心がましい。(2)(特に恋愛関係に用いる)相手に思いをかけている。懸想めいた気持を持っている。好色がまし。

このように、辞書においても、恋愛に関わると、二つの形容詞は「好色」という要素を持っているように認識されている。

(5) 『日本語学大辞典』(東京堂出版)五一頁、「豊語」、執筆者・蜂矢真郷。引用の際、算用数字は漢数字に改められた。

(6) 動詞(連用形)とした重複素の分類は蜂矢真郷「重複形容詞と重複形容動詞」『同志社国文学』二四号、一九八四年三月)に従う。

(7) 日本国語大辞典の記述に「いつも心にかけている」とある。

(8) 動詞「かける」につく名詞と助詞の傾向を示しておく。用例数の取得方法：国立国語研究所(2022)『日本語歴史コーパス』中納言2.6.1、データバージョン2022.03 <https://crdminjal.ac.jp/chy/> 検索方法：作品「源氏物語」語彙素「かける」

名詞の傾向：心(26)頼み(5)神(3)こと(3)あはれ(3)命(2)鏡(2)世(2)冠(2)事(2)

助詞の傾向：に(30)を(28)は(6)も(5)の(4)

(9) 「すぎずきし」の被修飾部は「心」や「やう」が目

立つ。人の心を表す語だからであろう。これに対して、「かけかけし」の被修飾部は「筋」という関係を表す名詞が目立つ。「かけかけし」が関係を問題にするからであろう。

(10) 玉上琢弥『源氏物語評釈』(7・四〇二頁、第四版、角川書店)

(11) 『鑑賞と基礎知識』若菜下(後半)』(三〇頁、日向一雅・通積、至文堂、二〇〇四年)

(12) 玉上琢弥『源氏物語評釈』(7・二五九頁・現代語訳、角川書店)

(13) 『鑑賞と基礎知識』若菜上(若菜上(後半)』(二〇三頁、吉田雅雄・語句解釈②、至文堂、二〇〇〇年)

(14) 薫の言葉も、匂宮を推挙して後見人に回ろうとするやり方も、そのあとの大君の反応も、解釈が定まっていない部分である。

◆玉上評釈・語釈(一〇)「かけ／＼しげに」項

あちこちにひっかけ、こちらにひっかけ、懸想めいて。いろいろと意味ありげに。薫の話は、中の宮の事のようにもあり、また自分(姫君)の事のようにでもある。また匂宮の事とっていると御自身の事のようにもあらるので。

『源氏物語評釈』(10・二七二頁、第五版、角川書店)

(15) 玉上琢弥『源氏物語評釈』(10・二七二頁)は、この部分を男性論と解する。薫は匂宮と異なる男性「何ごとにもあるに従ひて、心をたつる方もなく、おどけたる

人」(新全集・椎本・5・二〇八頁)を引き合いに出しており、その対照的な性格の人物こそ薫自身ではないかと考えている。本稿も玉上説に従う。こうして薫は自分自身を語ることで、大君に恋愛対象として自分の存在をほめかしているとも読める。

(16) 源氏物語の表現は、物語の構造に連動し、一貫性を持っている。反復される表現は、作品の前後を響き合わせることで、筋だけに留まらない意味を生じさせる。表現研究は、物語全体に関わる有機的な結びつきを見出し得る。解釈にとって必要不可欠な基礎的研究のひとつである。しかし、一方で、表現研究は、特定の表現という細部へ向かうため、成果を文学研究全体と関わる形で改めて意味づける必要がある。厳しいことをいえば、全体的視野のないものは文学研究としての価値はほとんどないといえる。現行の解釈を刷新していく力がなければ、表現研究は文学研究にはならないのである。高橋早苗は「表現へのこだわりが、時として図式化という弊害をもたらすことも自戒しつつ、物語世界にちりばめられた言葉のなかからある一つの言葉の軌跡をたどることで、物語が探りあてひき据えようとするものが浮かび上がる。この意義を看過してはならないのではないか」(『源氏物語』の「たぐひなし」―紫のゆかりの女君たちをめぐる―、『中古文学』九〇号、二〇一二年十一月、九〇頁)と論じた。これは、特定の表現に注視する研究が意味を分類して満足するなどして、解釈的価値を提出しな

いまま終わる恐れがあることを懸念したものであろう。

源氏物語の「かけかけし」全用例一覧(10例)

【誰から誰への好意か】《誰が誰を評価したか・文の種類》

1【光源氏↓六条御息所】大臣聞きたまひて、かけかけしき筋にはあらねど、なほさる方のものを聞こえあはせ人に思ひきこえつるを(濔標・2・三一〇頁)《光源氏↓光源氏・心内文》

2【光源氏↓玉鬘】なほ、とてもかくても見苦しうかけかけしきありさまにて心を悩まし、人にもて騒がるべき身なめり(藤袴・3・三二八頁)《玉鬘↓光源氏・心内文》

3【朱雀院↓玉鬘】口惜しう、宿世異なりける人なれど、さ思しし本意もあるを。宮仕など、かけかけしき筋ならばこそは、思ひ絶えたまはめ(真木柱・3・三五二頁)《朱雀院↓朱雀院・会話文》

4【柏木↓女三宮】一日はつれなし顔をなむ。めざましう、とゆるしきこえざりしを、見ずもあらぬやいかに。あなかけかけし(若菜上・4・一四九頁)《小侍従↓柏木・会話文》

5【光源氏↓玉鬘】今は、北の方もおとなひはてて、かの昔のかけかけしき筋思ひ離れたまふにや(若菜下・4・一七八頁)《語り↓光源氏・草子地》

6【光源氏↓六条院の妻たち】院の上だに、かくあまたにかけかけしくて、人に庄されたまふやうにて、独り大殿籠る夜な夜な多く、つれづれにて過ぐしたまふなりなど

(若菜下・4・二二八頁)《柏木↓光源氏・会話文》

7【柏木↓女三宮】ただかばかり思ひつめたる片はし聞こえ知らせて、なかなかかけかけしきことはなくてやみなむと思ひしかど(若菜下・4・二二五頁)《柏木↓柏木・心内文》

8【薫↓大君と中の君】心苦しうてとまりたまへる御事どもの、絆など聞こえむはかけかけしきやうなれど(椎本・5・二〇〇頁)《薫↓薫・会話文》

9【匂宮↓中の君薫↓大君】かけかけしげにのたまひつづくるに、なかなか聞こえんこともおぼえはべらで(椎本・5・二〇八頁)《大君↓匂宮(薫)・会話文》

10【薫↓大君と中の君】かけかけしき筋は、いづ方にも思ひきこえじ(総角・5・二五六頁)《薫↓薫・会話文》  
(おはら みとき)／中央大学文学研究科国文学専攻・博士課程後期課程